

第 1671 回 (3 月 19 日)

農村社会学の系譜

相 川 良 彦

1960 年代以降における農業経済畑の農村社会学研究の趨勢をみることによって、この間の農村社会学研究の特徴を指摘できる。第 1 に、農民論は一般雑誌、マスコミ、実務面において多く言及されてきた。理論面では、シュンペーターの革新者概念の現代日本農民への適用の可否や農民意識研究の仕方をめぐり部分的に研究の進展が見られたが、その詰めは未だ不足している。むしろ、参与観察によって洞察力にとむ優れた農民論が、ジャーナリズムに取り上げられ、幾つか出たことの方が特筆される。

第 2 に制度体としての直系家族を研究する「家」論は、研究業績数が少ない。それは、都市を対象とする家族社会学が隆盛をきわめたのと対照的であった。「家」論における論理の完成と調査方法の手詰まりがその停滞をもたらした要因と考えられる。こうした停滞を突き破る試みの一つとして、文化人類学の成果や視点を移入し、新たな切り口で既に論及されている「家」構造を味付けしなおすものがある。二つに、家族社会学に発展した調査手法を農家調査に適用し、「家」構造を家族関係として再構成しようとする調査研究がある。その場合、兼業化により直系家族が夫婦家族へ変質するか、逆に直系家族を維持存続せしめるように作用しているかの議論が焦点になっている。それは兼業農家を日本農業の中でどう位置づけるかという焦眉の農政課題に照合するものであった。ただ、両論とも家族社会学の調査手法を誤用し、家族員の協力度合いという一元的な尺度で判定することによって、議論を単純なものにしている。

「家」の主要な構成要因の一つに、隠居 (= 世代交代) 研究がある。この分野には幾人かの緻密な調査研究が蓄積されている。それに

よれば、隠居は一般に幾つかの権限の移行過程から構成され、その移行の仕方には地域的差異がある。試みに、移行過程を一つの恒等式で表現すれば、地域によって何を不変とし何を変化させるかの比較が可能となり、地域条件に左右される隠居規範の動態を明示的に捉えることができる。

第 3 に村落論は、多様で豊富な研究業績が輩出している。それらは、システム論的に二つの系統に分類される。一つに、村落は社会的単位である家と家との直接的関係により構成されるという見方で、有賀喜左衛門の同族団論を典型とする。二つに、村落は家と家とがある種の媒体を介して結びつくまとまりという見方で、鈴木榮太郎の自然村理論を典型とする。福武直は、有賀の同族型村落を商品経済という座標軸に位置づけ、その進展形態として家々がとり結ぶ並列的結合という講組結合の村落類型を設定した。他方、鈴木が媒体として一般的に団体を考えたのに対し、余田博通は水利団体という具体的組織を、渡辺兵力・川本彰の村落領域論は作物保全・人間保全などの機能を、相川良彦は組織と規範という次元を異にする二つの形象形態を、それぞれに媒体に置いて村落構造を説明した。

村落が媒体を介した家々の間接的結合であるとする、その社会関係は機能的であるが、環境情勢に対しては硬直的となること、また、情報回路は同族団より多いが、講組結合の村落に比べ減らすことができ、情報節約的であるという特徴を指摘できる。